

大阪市立大学 正 会 員 角野昇八
大阪市立大学 学生会員 ○ 関本武史

1. 序論

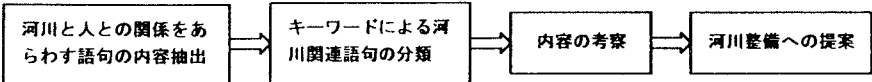
河川，なかでも都市の中の河川は，古代から数知れない恩恵を人々に与えてきた。しかるに，現代になって舟運や漁業の場としての役割を終えるとともに，その主要な役割は洪水や下水の単なる「排水路」としてになる一方，深刻な水質汚濁の問題も抱えるようになっていく。このような事情から，人々は都市の河川を邪魔者扱いにし，両者の関係は希薄なものとなる傾向にある。同時に，人々の頭の中からは，往時の都市河川との間の良好な関係の記憶が急激に失われようとしている。そして，このことが人々と河川との距離をますます遠ざけるものとしてきている。

本研究では，往時の人々と都市河川との関わりを雑誌・書籍の諸文献や俳句を通じて調査し，それらを通して現代の人々と都市河川の間で欠落してしまった事柄を見いだすとともに，その結果を現代の河川整備に活かす可能性を探ることを目的とする。

2. 諸文献や俳句に見られる人と河川のかかわり方

2.1 対象とした諸文献と調査手順

調査対象とした文献は，主として大阪の河川を対象として著わされた単行本（38冊）



図－1 調査手順

および雑誌（4誌，113記事）と俳句（24句集，272句）とした。また，それらの出典の時期は，江戸，明治，大正期を中心とした近代とした。調査の要領は，図-1に示すような手順により行った。なお，調査対象が往時の文献類であって，その取得には自ずと偏りがあることが考えられたため，調査結果にはいっさいの統計的処理は行っていない。

2.2 調査結果の整理

諸文献から得られた往時の河川と人々との関係を表す言葉や表現をいくつか抽出し，まず大項目としてキーワードを設定するとともに，各キーワードの中に中項目の用語を配置して結果を整理した。この中項目には，類似の内容を持つ語句や表現が小項目として続い

キーワード：気持ち ● 涼しさ(42) ● 安らぎ(5) ● 心地よさ(2) ● 新鮮な気持ち(1)	キーワード：行為 ● 魚を捕まえる(16) ● 水屋が商売する(7) ● 水辺で遊ぶ(12) ● 舟で芝居を見物に行く(6) ● 川沿いでの花火見物(3) ● 川沿いでの祭り(22)	キーワード：事物 ● 舟（花火を見る，涼む，芝居を見る）(95) ● 橋（納涼，祭り）(84)
キーワード：情景 ● 川風がそよぐ(23) ● 動物(57) ● 植物(40)		キーワード：利用 ● 堤防上の散歩道(2) ● 川岸に芝生を植える(2) ● 川沿いの空地，公園(13)

表－1 諸文献や俳句から抽出された「川」に関するキーワードと内容

ている。その結果を表-1に示す。ただし，表中には中項目までしか示していない。抽出された小項目の数を中項目に続くカッコの中に数字として示した。この表に示されるように，キーワードとしては「気持ち」および「情景」，「行為」，「事物」，「利用」に分類することができた。これらの中で，「利用」の内容には現代に通じるもののがかなりあるものの，他の大項目及びその中の中小項目は現代では全くなか，あるいはかなりの程度失われているものである。特に，「涼しさ」は現代人が忘れていたものといえてよく，往時の人々は河川のオープンスペースの中で「情景」の中項目内容とともに体に心地よい涼しさを日常的に強く感じていたことが窺える。

2.3 調査結果に見られた特徴的な内容

調査の結果、多くの雑誌記事や俳句の中に、川で感じられる涼しさや川にある動植物、川での遊興行為に関する言葉や表現が多く見られた。例えば、俳句「涼しさに四つ橋を四つ渡りけり」(来山)や「川の兩岸に青い葦が一面に生えて川風にそよいでいる」¹⁾あるいは「川水に映る祭提灯の涼しい火影」²⁾などにその内容が典型的に表されている。このように、往時の河川は人々の心の中であって大いなる「癒し」を人々の日常生活に与えていたことが窺える。また、川に関わる事物としての「舟」や「橋」に関する記述も数多く、その存在が川に関わる事物として人々に強い心象を与えていたことも窺える。

2.4 調査結果のまとめ

本調査結果よりうかがわれた生活の中での河川の姿の変遷を木村・江上・星³⁾と同様な形式で図-2に作成した。同図に示すように、河川とその周辺の場合は、当初は生活の場そのものであって、恵みを受るとともに時にその脅威に脅かされる存在であったものが、時とともにそこでの水遊びや芝居見物あるいは祭りなどを通して人々の娯楽や文化、精神の中に溶け込んでいったことを見ることができる。そして、それを促進させるものとして作用した「涼しさ」や「動植物」、「舟」、「橋」の存在も忘れることはできない。

3. 現代の河川整備への若干の提言

以上に挙げた「涼しさ」、「動植物」、「舟」、「橋」のうち、橋以外は往時にあって現代にはすでにないか、あるいはほとんどないものとして指摘することができる。(ただし、橋も現代の交通事情などのためにすでに往時の橋とは異種のものとなってしまうかもしれない。)残るもののうち、動植物の存在の重要性は、近年再認識され「多自然型河川工法」として現代の河川整備にその再生が図られているとっていいだろう。一方、船は、舟運が衰退したこともあって、その役割は現代では軽視される傾向にある。しかるに、往時の生活の中で様々な形で人々に娯楽を与えたことを考えるとき、単なる舟運用としてではなく、生活にゆとりを与える道具の一つとして、また他の娯楽と有機的に結合した形で活用の道を再考できるのではないかと考えられる。さらに、川での涼しさは、恐らく多くの現代人がすでに忘れ去っているか、あるいは気がつかないでいる情感の一つではなからうか。景観上の観点やオープンスペースを与えるものとして河川の重要性はすでに各所で指摘されてきているが、それを真に生かした形とするためには、「涼しさ」の要素が重要な役割を果たしていることに留意する必要があるであろうことを指摘することができる。

参考文献

- 1) 下田将美：「表から見た大阪・裏から見た大阪」, 京阪百話, 1933 年。
- 2) 若原史明：「ぎおん祭」, 上方, 夏祭号, 1931 年。
- 3) 木村吉晴・江上和也・星博：「歴史と文化を生かした川のあり方に関する調査研究」, リバーフロント研究所報告 第 11 号, 2000 年, 301-312。

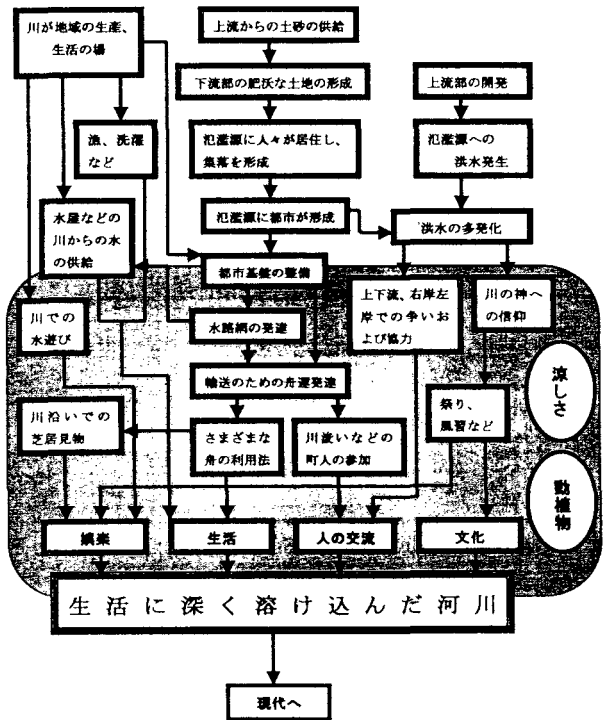


図-2 生活の中の河川の姿の変遷